

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730840

研究課題名(和文)「移動する子どもたち」を対象とした中学校社会科教材開発研究

研究課題名(英文) A study on the development of teaching materials in Social Studies for internationally mobile students.

研究代表者

北上田 源 (Kitaueda, Gen)

琉球大学・大学教育センター・講師

研究者番号：00596059

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：日本でも国籍に関係なく国境を越える移動を経験する子どもの数が増えている。それにもかかわらず、中学校でこうした子どもたちに社会科を教えるための教材はかなり不足している。そこで本研究では、国境を越えて移動した人物を取り上げた社会科教材を開発し、授業実践を行った。その結果、生徒は学習内容と自分との関わりに気づき、主体的に社会科を学ぶことができるようになった。今後、開発した教材をさらに多くの学校で用いることができるように改善していく必要がある。

研究成果の概要(英文)：In Japan, the number of internationally mobile children are increasing. And yet, the needed Social Studies teaching materials for such middle school children are in short supply. So I have developed Social Studies teaching materials which include experiences of internationally mobile people, and have put this material in practice during this study. In consequence of examining these lessons put into practice, students notice the relationship between the material that is being taught and themselves. It enabled the students to take initiative in study social studies. In the future, I will improve on the materials so that it can cater to a wider range of educational institutions.

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：教材開発

1. 研究開始当初の背景

近年、国境を越えた人口移動の増加にともない、国内でも従来の「外国人児童/生徒」という捉え方ではその実態を把握できない「移動する子どもたち」が増加している。この新しい捉え方は、従来の国籍による把握だけでは十分ではなかった、国内外の移動にともなう複数のカリキュラム間の移動、家庭と学校での言語環境の移動など子どもの多様な言語的/文化的背景を考慮に入れた教育的対応の必要性を指摘するものである。

そうした「移動する子どもたち」が日本の学校において直面する課題として、日本語で行われる教科の学習が挙げられる。一定程度生活言語を身に付けた子どもであっても、抽象的な学習言語をともなう教科の学習は難しく、特に日本社会との結びつきが弱い子どもたちが社会科の学習をする際には大きな困難をともなうことが多い。

それにも関わらず、こうした子どもたちが学習することを想定して作成された教材は非常に少ない。また、特に中学校においては目前に迫った高校入試に向けた対策に力が注がれることが多く、必ずしも子どもたちの学習経験や将来設計などを考慮した学習が行われているとは言えない状況がある。

2. 研究の目的

本研究の目的として次の3点が挙げられる。

1つ目は、「移動する子どもたち」の例として沖縄におけるアメラジアンの子ども(アメリカ人と日本人の間生まれた子ども)の事例に注目し、それぞれの子どもたちの家庭環境、頻繁な移動歴、日本語以外での言語での学びの状況の実態などについて明らかにすることである。

2つ目は、アメラジアンの子どもたちが日常的に中学校社会科授業で用いることがで

きる教材の開発とその教育的効果の検証を行い、「移動する子どもたち」の学びを支援するために必要な教材とその効果の検証を行うことである。

3つ目は、将来的に作成した教材を公立学校の日本語教室等でも使用してもらうことができるように、公立中学校教員と連携し、協働で教材開発/授業検討を進めることである。

3. 研究の方法

本研究期間には、各年度に(1)生徒の言語使用状況・学習歴の調査(2)教材作成(3)授業実践(4)実践の振り返り/教材の改善を同時並行で行う。また、年度ごとに中学地理/歴史/公民の各分野の教材作成・授業実践を行うことで、中学校社会科の学習内容を広範に渡って取り上げる。

そのために、本研究ではアメラジアンの子どもが多く通うNPO法人のアメラジアンスクール・イン・オキナワに研究協力を依頼して、作成した教材を用いて継続的に授業実践を行う。さらに、公立中学校の社会科教員と定期的に集う場を設け、連携・協力して教材の作成およびその改善を行っていく。

4. 研究成果

本研究の成果としては、次のような点があげられる。

まず、アメラジアンスクールの子どもたちの移動歴、社会科学習歴の調査を通して、これまで十分に明らかでなかった「移動する子ども」たちの学習歴の一端を捉えることができたことである。特に、国境を越えなくても、異なるカリキュラムで教育を行う教育機関を移動することによって、生徒たちは複数のカリキュラムを横断する形での学習を経験しているという実態が明らかになった。これ

は、従来の「外国人児童生徒」という捉え方や、来日時期などだけに注目した調査では見落とされてきた部分である。

次に、外国人児童生徒の社会科学習において課題とされてきた点を視野に入れ、日本語教育が行われる現場のニーズに合わせた、一定程度まとまりのあるカリキュラム/教材を作成できたことである。これまで、国内の日本語教室の実態に適した社会科の学習教材はほとんどなく、まとまった量のカリキュラム/教材作成および授業実践を行った事例は本研究が初めてである。

最後に、これまであまり注目されることがなかった「移動する子ども」の学びの特徴が明らかになったことである。本研究では、カリキュラム/教材作成および生徒の学びの分析の際に、「主体的な学び」という概念を用い、子どもたちと似た経験を持つ「移動する人物」についての学習を取り入れた。それにより、生徒たちが自らの経験と結びつけながら学習内容を理解・解釈し意見形成をしていくという点など、これまで十分に明らかになっていなかった「移動する子ども」の学びの実態が明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

・ 北上田源

『『移動する子どもたち』を対象とした中学校社会科教材開発研究-アメラジアンスクール・イン・オキナワでの実践を通して』

第 62 回全国社会科教育学会全国研究大会 (2013 年 11 月 10 日, 山口県)

・ 北上田源

「在日外国人をめぐる諸問題を学ぶ中学校地理の授業づくり」

第 33 回全国在日外国人教育研究集会 (2012 年 8 月 20 日, 大分県)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北上田 源 (Gen Kitaueda)

琉球大学・大学教育センター・講師

研究者番号 : 00596059

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：